

古文総合 文法編

〈基礎から始める古文〉



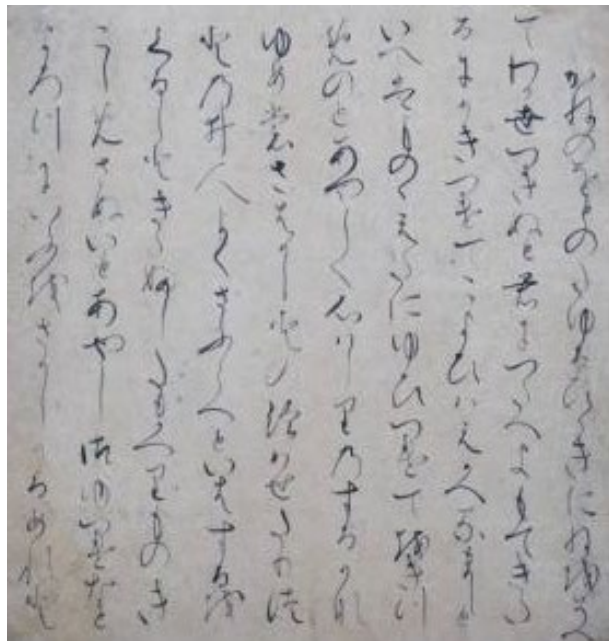
たり	46	助詞	61	にの識別	86
けむ	47	係助詞	62	なりの識別	86
たし	48	係助詞特殊用法	63	副詞	87
り	49	格助詞	65	敬語法	88
べし	51	接続助詞	71	敬語とは	88
らむ	53	副助詞	75	敬語使用例	89
まじ	54	終助詞	79	本動詞と補助動詞	89
らし	55	間投助詞	83	重要な敬語(超初級)	90
めり	55	同音の識別+副詞	84	敬意の方向	91
なり	56	ぬ・ねの識別	84	敬語法応用	92
なり(断定)	57	る・れの識別	84	最高敬語	92
たり(断定)	59	なむの識別	85	自敬表現	93
ごとし	59	らむの識別	85		

古典文法基礎

歴史的仮名遣い

行／段	ア段	イ段	ウ段	エ段	オ段
ワ行	わ	ゐ	う	ゑ	を
ラ行	ら	り	る	れ	ろ
ヤ行	や	い	ゆ	え	よ
マ行	ま	み	む	め	も
ハ行	は	ひ	ふ	へ	ほ
ナ行	な	に	ぬ	ね	の
タ行	た	ち	つ	て	と
サ行	さ	し	す	せ	そ
カ行	か	き	く	け	こ
ア行	あ	い	う	え	お

仮名文字47字を約1000年頃以前の発音通りに表記する方法を歴史的仮名遣いという。



歴史的仮名遣いから現代語への変換方法

- 語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」↓「わ・い・う・え・お」
- ㄱ行の「ゐ・ゑ・を」↓「い・え・お」
- 「む」「らむ」「けむ」「なむ」などの「む」↓「ん」
- 「ぢ・づ」↓「じ・ず」
- 「くわ・ぐわ」↓「か・が」
- au→o: iu→yu: eu→yo: (「:」は伸ばす音)

↓まずは、ローマ字にして考える！

(例題)

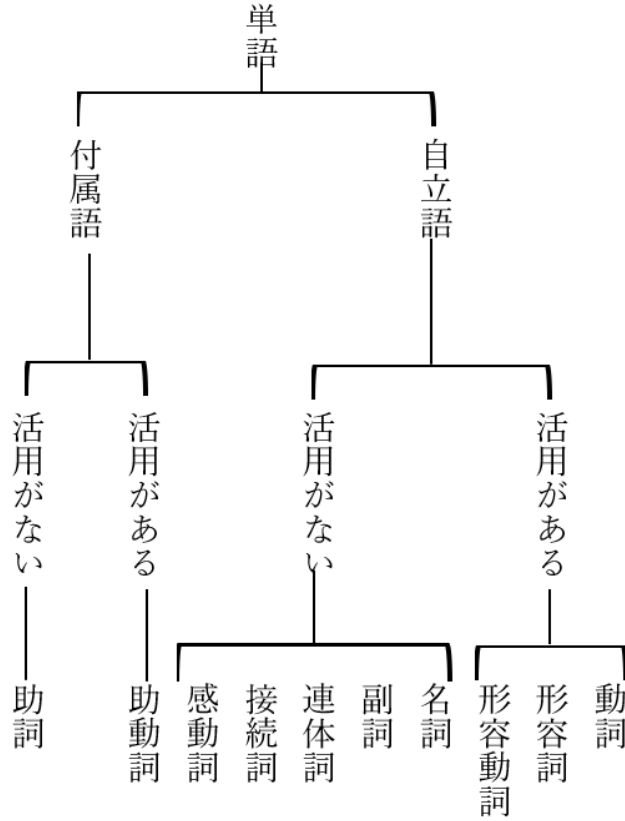
なでふ

くわんぱく

さうし

まうす

てふてふ



自立語

単独で文節を作ることができる。
必ず文節の最初にある。
一つの文節に自立語は必ず一つあり、
二つ以上はない。

付属語

それだけで文節を作ることができない。
常にほかの単語の後につく。
一つの文節に付属語がない場合や、二つ以上ある場合もある。

文節

意味が不自然にならない程度に文を区切ったときの最小の単位のこと。
※文節の切れ目には、「ネ」「ヨ」「サ」などを入れることができる。

品詞分解

『

』ことを品詞分解という。

(例題)

京／に／入り立ち／て／うれし。

家に至りて、門に入るに、月明ければ、いとよくありさま見ゆ。

※複合語

単語にはいくつかの語が複合してできている語が存在する。

「山里」は、(山にある里)の意味だが、

一つで名詞と捉えるのが普通。

しかし、この語同士の結合の度合いは低いことがある。

「もの心細し」という形容詞は、

「ものなむ心細くおぼゆる」などと利用され、

分離する事がある。

接続詞・連体詞の扱い

そのほとんどが他の品詞から転じてできたもの。

品詞としてはよわい。

「かかれば」

「かかり」(ラ変動詞已然形) + 「ば」

(助詞)

「かかれば」(接続詞)

「かくて」(接続詞・副詞)

多くの品詞にまたがる単語

「あはれ」(名詞・感動詞)

「みづから」(名詞・副詞)

「つれづれ」(名詞・形容動詞・副詞)

「すがら」(名詞・副詞・接尾辞)

「あまた」(副詞・連体詞・名詞)

「あたら・うたて・もとな」(連体詞・

副詞・感動詞)

活用形

咲く	基本形
咲	語幹
	未然形
	連用形
	終止形
	連体形
	已然形
	命令形

活用：『

』のこと

基本形：終止形と同じ。

語幹：活用で変化しない部分。

未然形（くず）：『

』状態を表す。

連用形（くて）：基本的には用言に連なる形。助動詞や助詞につながることもある。

終止形（く）。）：文が終わって止まる形。

連体形（くとき）：体言（名詞）に連なる形。

※ 連体形の省略…』

』という形の時に、体言が省略されることがある。

已然形(くども)…』

』状態を表す。(現代語においては仮定形。)

※ 花咲けば…現代語訳』

』

古語訳』

』

命令形(くせよ)…命令するときの形。

(例題)

あひ戦はむ心もなかりけり。

あしずりをして泣けども、

尻けよ。

深きゆゑあらむ。

石山へ参る。

静かなる暇なく

接辞

単独で用いることはなく、語に意味を付加する語。

単語とは異なるので注意が必要。

接続の度合いも低く、助詞などが間に挟まることもしばしば。

また、二種類以上を複合的に用いることもあるので注意。

主要な接頭辞

御 尊敬の意味を付加する。御几帳 小 小さいこと、かわいいことの意味を付加する。

み 美称の意味を付加する。み吉野 小百合

あひ 互いにの意味を付加する。あひおもふ うち ちよつとの意味を付加する。

た 手の意味を付加する。たぐる うちぞ泣かるる。(自然と少し泣かれる)

主要な接尾辞

めく くようになるの意味を付加する。

春めく (春らしくなる)

げ 様子を表す語に変化。

動きげ (動く様子)

さ 名詞化。

思はずさ (思いがけなさ)

ざま 様子を表す語に変化。

里へざま (里帰りのように)

たし 程度が甚だしいの意味を付加する。

らうたし (労たし↓労力が甚だしい↓労力が酷い)

ほど守ってやりたい↓かわいい)

ぶる くのように見せる。

ひたぶる (実直な様子)

ども 複数形化。こども (子たち)

動詞基礎

動詞の活用

動詞には全部で九種類の活用がある。

四段活用

上一・二段活用

下一・二段活用

カ・サ・ナ・ラ行変格活用

終止形はすべてウ段音になっている。※ラ変のみ「リ」

活用の表し方

○行○段活用動詞 ○○○形

○行変格活用動詞 ○○○形

動詞の判別順序

① 変格・上一・下一

② 文中での活用を確認

a 音：四段活用

i 音：四段・上二段活用

e 音：四段・下二段活用

③ 「ず」をつけてどの音になるか？

※ 必ず訳して意味を確認すること！



四段活用動詞

	基本形
咲	語幹
	未然形
	連用形
	終止形
	連体形
	已然形
	命令形

打消の助動詞の「ず」を付けた時必ずア段音となる。

ア・ザ・ダ・ナ・ヤ・ワ行の語には四段活用の語が存在しない。

※「書く」↓「書かない」とするとき。

書かず↓『

』↓『

』

書けず↓『

』↓『

』

つまり、古典語において可能の意味を含んだ語「読める」などは存在しない。

可能動詞

「読める」↓「読む ことができる」このように分けられるものが可能動詞。

「染める」↓「染める ことができる」とはならない。

上二段活用動詞

老ゆ	基本形
	語幹
	未然形
	連用形
	終止形
	連体形
	已然形
	命令形

打消の助動詞の「ず」を付けた時必ずイ段音となる。

ヤ行上二段に注意！ 『 』 『 』 『 』 『 』 『 』

下二段活用動詞

得	基本形
	語幹
	未然形
	連用形
	終止形
	連体形
	已然形
	命令形

打消の助動詞の「ず」を付けた時必ずエ段音となる。

ワ行下二段に注意！ 『 』 『 』 『 』 『 』 『 』 『 』

語幹活用動詞に注意！ 『 』 『 』 『 』 『 』 『 』 『 』

※ 「寝」は「寝ぬ（いぬ）」という似た語が存在。（ナ下二）

ア行下二段に注意！ 『 』 『 』 『 』 『 』 『 』 『 』 『 』

下二段活用動詞

蹴る	基本形
	語幹
	未然形
	連用形
	終止形
	連体形
	已然形
	命令形

「蹴る」この一語のみ。

上一段活用動詞

射る	基本形
	語幹
	未然形
	連用形
	終止形
	連体形
	已然形
	命令形

所属語

み	に	き	い	ひ
マ行	ナ行	カ行	ヤ行	ハ行
ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ
ㄣ ↓ ㄣ	ㄣ		ㄣ	ㄣ
	ㄣ		ㄣ	ㄣ
ㄣ				

(ヤ行下二段) に注意!

る + ゐ

ワ行『

』

』

↑覚え方

複合語の「後見る」「率ゐる」「用ゐる」「試みる」など…最低これは覚える。

正格活用まとめ

活用	四段	上二段	下二段	上二段	下二段
未然形					
連用形					
終止形					
連体形					
已然形					
命令形					

サ行変格活用動詞

す	基本形
	語幹
	未然形
	連用形
	終止形
	連体形
	已然形
	命令形

所属語は『 』 『 』 のみ。

複合語がたくさんあるので注意。主に漢語。

漢語名詞	
和語名詞	+
用言	す 「愛す」「かなしうす」

活用が異なる種類の動詞に『 』がある。

これはサ行四段活用動詞なので注意。

ナ行変格活用動詞

死ぬ	基本形
	語幹
	未然形
	連用形
	終止形
	連体形
	已然形
	命令形

所属語は『 』 『 』 『 』のみ。

意味が同じであるが、活用が異なる種類の動詞に『 』がある。

これはサ行変格活用動詞なので注意。



ラ行変格活用動詞

あり	基本形
	語幹
	未然形
	連用形
	終止形
	連体形
	已然形
	命令形

所属語は『 』 『 』 『 』 『 』 『 』 『 』 『 』 『 』 のみ。

複合語の『 』 『 』 『 』 『 』 『 』 『 』 に注意。

さらに、これらは他の語と連結して別の品詞になる場合がある。

かかる…（連体詞）このような

かかれば…（接続詞）こうなので・だから

動詞応用

動詞の自他

自動詞と他動詞は古代語において区別があるものとなないものがある。

中でも区別があるのは、活用と語尾の派生で分けることができる。

活用での区別

多いのは、「四段↓自動詞・下二段↓他動詞」という形。(絶対じゃない)

「染む」↓「染まず」(染まる・自) 「染めず」(染める・他動詞)

※例外も多くあるので、活用が二種類以上考えられる語については、

自他の違いがある可能性に留意して解く程度の認識が良い。

自動詞・他動詞

動作・作用を主体者自身の働きとして表現するものが**自動詞**。

主体から他に及ぶ働きとして表現する動詞が**他動詞**。

語尾の派生によって区別

「る」は自動詞語尾

「す」は他動詞語尾

であることが多い。

最終的には二種類の語を、

「くを○○する」なのか「くが○○する」なのかを訳して考える。

注意すべき動詞

自四―他下二型：臥す・入る・聞く・従ふ・沈む

自下二―他四型：切る・砕く・欠く

くを十自動詞

現代語にはほぼ存在しないが、目的語をとっているように見える自動詞も存在する。

よだれをたれる

これは現代語にもみられる例だが、古語では次のようなものもある。

あふと見る夢をさめつる
悔しさに

こういった場合助詞「を」の訳は臨機応変に行うべきである。

動詞化という現象

古代語では、別の品詞を動詞化することができる。

『 』 (四段) あわれがる・めでたがる

む (下二段) 痛む

さぶ (上二段) 山さぶ・茂みさぶ

『 』 (四段) 仄めかす・人めかす

だつ (四段) あやにくだつ・心だつ

『 』 (四段) 今めく・煌めく

ばむ (四段) けしきばむ・よしばむ

やぐ (四段) 華やぐ・若やぐ

『 』 (上二段) あはれぶ・さとぶ

『 』 (四段) まどはかす・はしらかす

む (四段) あはれむ・赤む

※他動詞的意味の強調をする。

動詞の強調

動詞を強調する形には、次のような形がある。

① (「ただ」 + 動詞 + 「に」) (+ 助詞) + 動詞

※ 否定形は、動詞 + 「に」 + 「だに」 + 動詞 + 「ず」

② 動詞 + 「と」 + 動詞

※ 強調の内容的に「皆(すべての)」と訳すこともある。

③ 動詞 + 「し」 + 動詞 + 「ば」

(うゑしうゑば秋なき時や咲かざらむ花こそ散らめ根さへ枯れめや(古今)

同族目的語

本来、自動詞であるものが、その動詞と語源的・意味的に重複する目的語をとることがある。強調表現の一種である。

家思ふと眠を寝ず居れば(万 4400)

代動詞

古文にも、代動詞、英語で言う DO が存在する。

古文では、『 』もしくは「す」が用いられる。

走り井にて、破子などものすとて（蜻蛉）（破子：弁当などの容器）

この例文の「ものす」は「食べる」の意味だと文意で読み取れる。

「ものす」は「ものし給ふ」の形で、

「あり」の尊敬語として用いられることもある。

※ また、例外的な話ではあるが、「す」の代用として「あり」を用いることもある。

補助動詞

本来の実質的意味を失ったものを補助動詞という。

補助動詞になるのは、次のパターン。

- ① 動詞について敬意を表すもの
- ② 形容詞「べし」「ず」の下につく「あり」
- ③ 助詞を介して動詞の下につく「す」
- ④ 「て」「つつ」を介して動詞の下につく「あり」
- ⑤ 「て」を介して動詞の下につく「みる」

形容詞・形容動詞・音便

形容詞

高し		基本形
		語幹
		未然形
		連用形
		終止形
		連体形
		已然形
		命令形

美し		基本形
		語幹
		未然形
		連用形
		終止形
		連体形
		已然形
		命令形

ク・シク活用

この二つの見分けに
関しては、基本的に
「なる」をつければ
わかる。

「くなる」

↓ク活用

「しくなる」

↓シク活用

(例)

高くなる

美しくなる

美くなる…×

形容詞とは

形容詞とは、『

これは、『

』によって変化するものである。

』である。

活用

① 本活用…『

』

(断定「なり」だけは本活用に付く↓「高きなり」「美しきなり」)

② 補助活用…断定「なり」以外の助動詞がカリ活用に付く(カリ活用の下にあるのは普通の助動詞)

形容詞の仮定用法

通常、未然形+ば が仮定条件の書き方。(花咲かば)

形容詞の場合、

『 が仮定(訳)もしくならば・もしくかったら

(例) 恋しくは 来てみよかし ちはやぶる 神のいさむる 道ならなくに

『 来てみなさいよ。神がとめる道ではないことなのに。

※「いみじくはあれども」(素晴らしくはあるけれど)のように仮定にならないこともある

形容動詞

堂々たり	基本形
	語幹
	未然形
	連用形
	終止形
	連体形
	已然形
	命令形

静かなり	基本形
	語幹
	未然形
	連用形
	終止形
	連体形
	已然形
	命令形

形容詞特殊用法

形容詞には特殊な用法がいくつかあるので注意。

① 『 『で感動（語り手の実感）を表す

（感動詞：「あな」「ああ」「あら」等）

あなきたな（訳） 『 『

② 『 『

感動（実感）を含みながら連体修飾する。

をかしの御髪や（訳） 『 『

（目の前にある髪の美しさを実感し、感嘆しながら発言している）

③ 『 『

原因理由を表し、『 『と訳す。（を は省略されることあり。）

野をなつかしみ（訳） 『 『

特殊形容詞

同じ	基本形
	語幹
	未然形
	連用形
	終止形
	連体形
	已然形
	命令形

接辞

次の接辞の際には、形容詞になり特定の意味を持つことがあるので注意したい。

『 ……』 ……のようである』の意味を付加する。

『 ……』 ……程度がはなはだしいという意味を追加することがある。単に「無し」という意味で

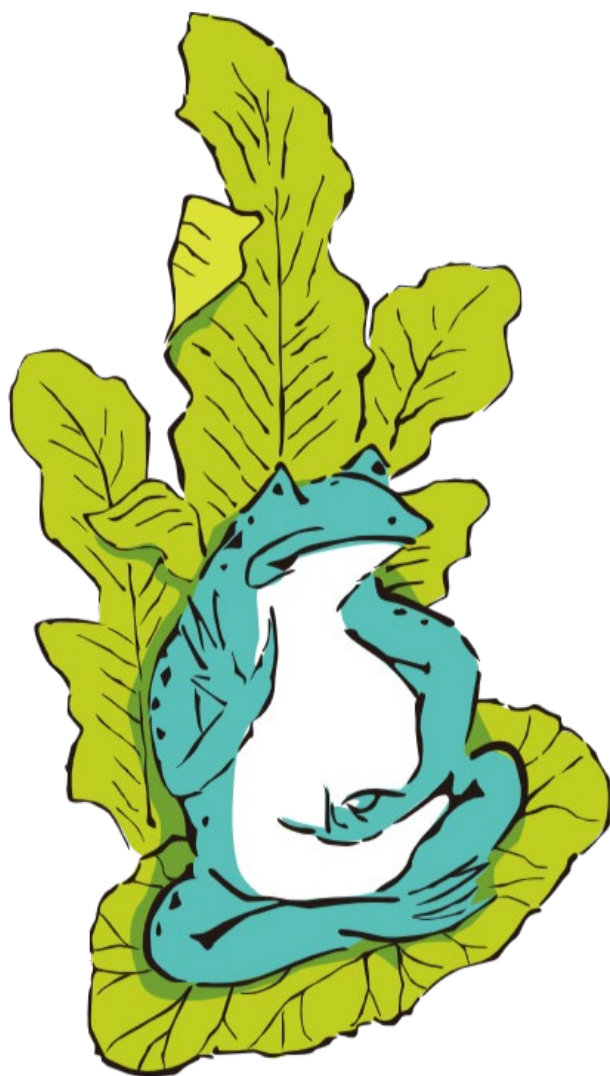
はないことに注意。(例) うしろめたなし・むつくけなし・のがれがたなし

音便

動詞の連用形・形容詞の連体形の語尾などが、発音の便宜上、文法の規則からはずれた音になることがある。

これを音便という。

- 『 …聞きて↓聞いて・継ぎて↓継いで・強き人↓強い人・悲しきかな↓悲しいかな
』 …給ひて↓給うて・呼びて↓呼うで・高く昇る↓高う昇る・楽しくて↓楽しうて
』 …飛びて↓飛んで・死にて↓死んで・近かるなり↓近かんなり
』 …知りて↓知って・ありて↓あって・立ちて↓立って



助動詞

る・らる

a 活用

b 接続（何形に接続するか）

る

らる

c 意味用法（および訳し方）

「	「	「	「
」	」	」	」
∴	∴	∴	∴
(訳)	(訳)	(訳)	(訳)
」	」	」	」

」

」

」

」

」

助動詞は
 共通テストで
 狙われる文法。
 読解でも必須。
 助動詞については、その
 助動詞の
 a 活用
 （ほほ用言の活用）
 b 接続
 （何形に接続するか）
 c 意味用法
 （および訳し方）
 d 見分け方
 ・ 意味の識別法
 ・ 同音判別法
 これらを暗記する必要
 がある。

d見分け方（意味の識別法）

① ↓ 『 』 が存在する時

② ↓ 『 』 が存在する時

③ ↓ 『 の形

④ ↓ 『 が主語になっている時

※ 『 は尊敬ではない。

例文

- ・つゆまどろまれず
- ・今日は都のみぞ思ひやらるる
- ・思ふ人の人にほめらるるは、いみじううれしき。
- ・かの大納言、いづれの舟にか乗らるべき。

打消語

打消し語は様々ある。
 代表例は次の通り。
 ず・じ・まじ・で・なし
 可能単独の意味を取るのは中世以降であり、中古までではない。

す・さす・しむ

a 活用

「
」

b 接続（何形に接続するか）

す … 「
さす … 「
しむ … 「

c 意味用法（および訳し方）

「 … 「
（訳） … 「
（訳） … 「

使役+受身

古代語において「させられる」という意味になる、使役+受身の形は存在しない。

d 見分け方（意味の識別法）

① 「
」時

② 尊敬語を伴わない「す・さす・しむ」

③ 尊敬語（「給ふ」「おはす」「おはします」等）が伴う時

（例）「しせ給ふ・させ給ふ・しめ給ふ」

例文

- ・（帝は夜を）明かしかねさせ給ふ。
- ・馬の腹射させて引き退く。（平家）

ず

a 活用

「 「

b 接続（何形に接続するか）

「 「

c 意味用法（および訳し方）

「 「 「 (訳) 「 「 「

京には見えぬ鳥なれば、みな人知らず。

(訳) 「 「

d 見分け方（同音の判別法）

「 「 「の助動詞 「 「 「の助動詞 「 「

この二つの間で見分けが必要になる。

① 「 「の時

↓ 「 「

② 「 「の時

↓ 「 「

例文

・風波やまねば、なほ同じ所（土佐）

む・むず

a 活用

b 接続（何形に接続するか）

c 意味用法（および訳し方）

「	「	「	「	「	「
」	」	」	」	」	」
：	：	：	：	：	：
(訳)	(訳)	(訳)	(訳)	(訳)	(訳)
「	「	「	「	「	「



む・むずの違い
 何が違うか？
 「むず」はもともと
 「む」「と」「す」「むと
 す」という形
 つまり…意味を強めた形

d見分け方(意味の識別法)

① 「 」 『 』 かどうか

「 」 『 』 ↓ 『 』 『 』

※「体言」が省略されている場合もある

② 「 」 『 』 かどうか

「 」 『 』 ↓可能性大

(と・とて は例外)

※「くとしたら」と訳せる↓『 』

訳が当てはまらない時は『 』 『 』

③ 主体者を見る

主語が一人称 ↓ 『 』 『 』

主語が二人称 ↓ 『 』 『 』

主語が三人称 ↓ 『 』 『 』

例文

・深きゆゑあらむ。

・われこそ死なむ。

・花を見て帰り給はむ。

・うれしからむ心地もせず。

・寝ざらむもわろかりなむ。

「適当」と「勧誘」
相手の身分が、低いか
または同程度の場合
「適当」

じ

a 活用

「 「

b 接続（何形に接続するか）

「 「

c 意味用法（および訳し方）

「 「 「

「 「

「 「

「

d 見分け方（意味の識別法）

「 「

① 主体者が「の時

↓ 「 「

② 主体者が「の時

↓ 「 「

例文

・わが道ならましかば、かくよそに見侍らじものを。
（徒然）

まほし

a 活用

『 』

b 接続（何形に接続するか）

『 』

c 意味用法（および訳し方）

『 』

『 』

』

き

a 活用

b 接続（何形に接続するか）

※ 『 こ（未然形） …こし、こしか
き（連用形） …きし、きしか
せ（未然形） …せし、せしか
し（連用形） …しき
』 に注意！

c 意味用法（および訳し方）

『 』

… (訳) 『 』

(鬼が私を) 殺さむとしき。

(訳) 『 』

』

けり

a 活用

「
」

b 接続 (何形に接続するか)

「
」

c 意味用法 (および訳し方)

∴ (訳) 「
」

∴ (訳) 「
」

d 見分け方 (意味の識別法)

① 「
」の時

② 「
」の中

③ 「
」する時

④ 「
」の時

↓ 「
」を疑うこと

例文

・追風の吹きぬるときはゆく船の帆手うちてこそうれ
しかりけれ (土佐)

つ・ぬ

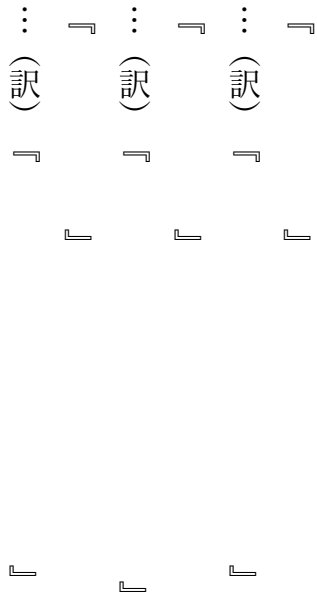
a 活用

つ

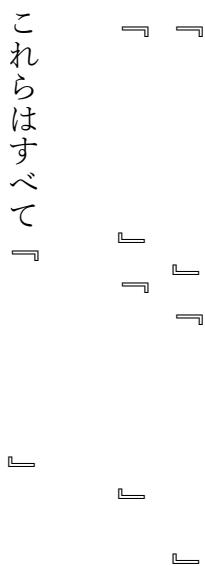
ぬ

b 接続 (何形に接続するか)

c 意味用法 (および訳し方)



d 見分け方 (意味の識別法)



動詞 + つ・ぬ + 動詞 + つ・ぬ

↓
動詞 + つ・ぬ

例文

- ・三河の国八橋といふ所に至りぬ。
- ・(港に) 御船 (私たちは) 返してむ。
- ・(扇が) 浮きぬ、沈みぬ。

たり

a 活用

「
」

b 接続 (何形に接続するか)

「
」

c 意味用法 (および訳し方)

「
」
「
」

「
」
「
」

d 見分け方 (同音の判別法・意味の識別法)

① 接続の確認 ↓ 「
」

「
」

or 「
」

② まず、「
」で訳してみる

↓ 無理なら 「
」

例文

・しれ者は走りかかりたれば、おびえまどいて御簾のうちに入りぬ。(枕草子)

・重き鎧の上に、重き物を負うたりいだいたりして(平家)

けむ

a 活用

「 』

b 接続 (何形に接続するか)

「 』

c 意味用法 (および訳し方)

「 』

： (訳)

「 』

： (訳)

「 』

： (訳)

「 』

： (訳)

「 』

「 』

「 』

「 』

「 』

「 』

「 』

「 』

「 』

d 見分け方 (意味の識別法)

① けむ + 「 』の時

↓ 「 』

② 「 』を伴う時

↓ 「 』

③ それ以外

↓ 「 』

例文

・あなうらやまし。などか習はざりけん。(徒然)

・行平の中納言の「関吹き越ゆる」と言ひけむ浦波、

たし

a 活用

『 』

b 接続（何形に接続するか）

『 』

c 意味用法（および訳し方）

『 』

∴（訳）

『

』

』

例文

- ・ 近う参って見参にも入りたかりつれども、（平家）
- ・ 家にありたき木は、松、桜。（徒然）

る・らる・す・さす・し

む・ず・じ・む・むず…



り

a 活用

「 「

b 接続（何形に接続するか）

「 「

↓覚え方…さみしいエリちゃん

c 意味用法（および訳し方）

「 「

∴ (訳)

「 「

∴ (訳)

d 見分け方（同音の判別法・意味の識別法）

① 接続の確認

↓ 「 「

∴ 「 「

↓ 「 「

∴ 「 「

われ、旅せり。

(訳) 「 「

② まず、 「 「で訳してみる

↓無理なら 「 「



d見分け方（意味の識別法）

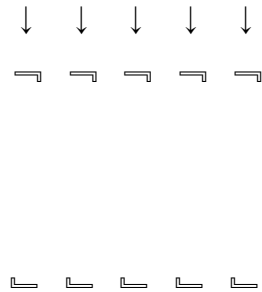
① 「
↓
」
時

② 主体者を見る

主語が一人称 ↓ 「

主語が二人称 ↓ 「

主語が三人称 ↓ 「



以上が基準となる。

例文

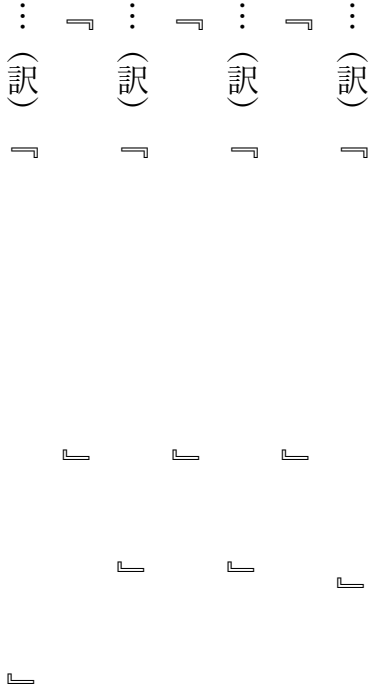
- ・このいましめ、万事にわたるべし。
- ・「(私は)この矢に定むべし」と思へ。
- ・その山を見るに、さらに登るべきやうなし。
- ・「もの一言いいおくべきことありけり」といひて、
- ・家のつくりやうは、夏をむねとすべし。
- ・船に乗るべき所へ渡る。

らむ

a 活用

b 接続 (何形に接続するか)

c 意味用法 (および訳し方)



d 見分け方 (意味の識別法)

① らむ + 『 の時

② 『 を伴う時

③ それ以外

む・らむ・けむ

む・らむ・けむはそれぞれ、未来・現在・過去の推量に対応している。混同しやすいのは、「らむ」と「む」である。「らむ」は今現在起きている事柄について、推量しているということに注意したい。

まじ

a 活用

b 接続（何形に接続するか）

c 意味用法（および訳し方）

ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ
ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
(訳)	(訳)	(訳)	(訳)	(訳)	(訳)
ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ

d 見分け方（意味の識別法） ↓ べし参照

ㄣ ㄣ ㄣ ㄣ ㄣ ㄣ



らし

a 活用

「
」

b 接続（何形に接続するか）

「
」

c 意味用法（および訳し方）

「
」
∴（訳）
「
」

※推定とは??

↓
「
」

めり

a 活用

「
」

b 接続（何形に接続するか）

「
」

c 意味用法（および訳し方）

「
」

∴（訳）

「
」

∴（訳）

「
」

d 見分け方（意味の識別法）

「
」

↓
「
」

なり

a 活用

「 「

b 接続（何形に接続するか）

「 「

c 意味用法（および訳し方）

「 「

∴（訳）

「 「

「 「

∴（訳）

「 「

「 「

「 「

d 見分け方（意味の識別法）

「 「

↓ 「 「

「 「

「 「

例文

・妻戸を、やはら、かい放つ音すなり。（堤中納言）

・百年に一年たらぬつくも髪我を恋ふらし面影に見ゆ
（伊勢）

・あはれにいひ語らひて泣くめれど、涙落つとも見え
ず。（大鏡）

なり(断定)

a 活用

「 」

b 接続(何形に接続するか)

「 」

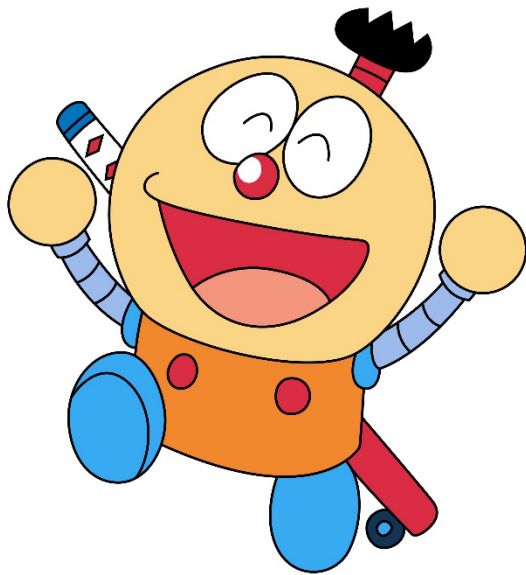
c 意味用法(および訳し方)

「 」

「 」

「 」

「 」



かの人
は中将にぞある。

「 」

「 」

「 ↓この時の「に」は

「 」

d見分け方 (同音の判別法・意味の識別法)

① 『 or 『 + 「なり」 ↓ 『 』

② 『 + 「なり」 ↓ 『 』

※ 『 の時は、活用形での見分けが不可能。文意で判定。

↓ 『 + 「なり」 ↓ 伝聞の「なり」

『 + 「なり」 ↓ 推定の「なり」

『 + 「なり」 ↓ 断定の「なり」

③ 『 の一部 ↓

※ 『 の接尾語に注意!

④ 『 の「なり」

※ Become の意味を持つとき。『 』 + 「なり」に注意!

形容動詞

形容詞・形容動詞は、物の状態・様子を表す際に用いる。

うつくし

は「美しいという性質」を表している。

うつくしげなり

という似語があるが、これは、「うつくしいっぽい」という感じで伝わり方に少し差がある。

たり(断定)

a 活用

『 』

b 接続(何形に接続するか)

『 』

c 意味用法(および訳し方)

『 (訳) 』

※存在はない!!

ごとし

a 活用

『 』

b 接続(何形に接続するか)

『 』

c 意味用法(および訳し方)

『 (訳) 』

『 (訳) 』



助詞

助詞の種類は全部で六種類ある。

- ① 係助詞 … 『 』する
- ② 接続助詞… 『 』をつなげる。
- ③ 格助詞 … 『 』をつなげる。
- ④ 副助詞 … 『 』を添える。
- ⑤ 終助詞 … 『 』に用いられる。
- ⑥ 間投助詞… 『 』を整える。呼びかけや詠嘆など。
(口語派生)

助動詞で注意すべきポイントは二つ。

★ 意味について

- ① 現代語に存在するもの。
- ② 現代語に存在しないもの。(もしくは用法が違う。)

★ 接続

特に接続助詞、終助詞はしっかりと接続まで覚えること。

係助詞

ぞ ……結び ㄱ

ㄱ 意味用法 ㄱ

ㄱ

なむ ……結び ㄱ

ㄱ 意味用法 ㄱ

ㄱ

や ……結び ㄱ

ㄱ 意味用法 ㄱ

ㄱ

か ……結び ㄱ

ㄱ 意味用法 ㄱ

ㄱ

こそ ……結び ㄱ

ㄱ 意味用法 ㄱ

ㄱ

は ……結び ㄱ

ㄱ 意味用法 ㄱ

ㄱ

も ……結び ㄱ

ㄱ 意味用法 ㄱ

ㄱ

係り結びの法則。

いづれの山か天に近し。

係助詞特殊用法

① 係りの副詞

「や・か」が省略され、『
そのけぢめをば、いかが分くべき。』
『で係り結びすることがある。

② やは・かは

『 』の可能性が高い。

③ もぞ・もこそ

『 』を表す。

雨もぞ降る。(訳)

『

』を表す。

』

④ くこそ…已然形、

↓

『

』

この頃の世の人は十七八よりこそ、経読み行ひもすれ、さる事思ひかけられず。
(訳)

』

⑤ 結びの省略

係り結びをしているはずだが、省略されているときがある。

補うべき語『

』

』

』

』

誠にただ人にはあらざりけりとぞ。

徳のいたれりけるにや。

⑥ 文末用法

く体言ぞ。

強い『』を表現することがある。

いかにかく言ふぞ。

(訳)『

反語の訳について

反語の訳仕方については参考書等には、

「くか、いやくではない」などと書いてある。

しかし、共通テストなどの選択肢では、

「いやくではない」だけの訳がある。

・よき人は、知りたる事とて、さのみ知り顔にやは言ふ。

身分が高く教養のある人は、(自分が)知っていることだからといって、そんなにも知り顔で言いはしない。

格助詞

★「の」「が」

主格…「Xの……」

連体修飾格…「XのY」

同格…「Xの……」

連体形

(X)、
~~~~~

準体格…「Xの」

比喩…「Xの……」

(↑「の」だけ)

文脈で判断

### ★「を」 (連用修飾格)

動作の対象

動作の起点

経過の場所

### ★「へ」 (連用修飾格)

動作の方向

#### 例文

・白き鳥の嘴と脚と赤き、鳴の大ききなる、水のうへに遊びつつ魚をくふ。(伊勢)

・草の花はなでしこ。唐のはさらなり、

・世になくきよらなる玉の男皇子さへ生まれたまひぬ。(源氏)

★「に」 (連用修飾格)

時・場所・方向・帰着点動作の対象・受身・使役の対象・動作の手段・原因・理由

強調 (同じ動詞に挟まれている「に」)

動詞・連用形 + ( + 係・副 ) + 同じ動詞

ただ腫れに腫れみちて、

敬主格 (上の語に対する敬意を表すとともに、上の語が主語になる)

Xに……尊敬語

※現代語で「に」が主格になることはないので注意

御前にも起きさせ給へり。(訳)

★「と」（連用修飾格）

動作の共同・引用・変化の結果等

強調（同じ動詞に挟まれている「と」）

「動詞・用」と（「係・副」）＋「同じ動詞」

来と来ては、『

生きとし生けるもの』

比喩『

東国の源氏、雲かすみと攻めのぼる。』

引用『

『渡守、はや舟に乗れ、日も暮れぬといふに

★「にて」（連用修飾格）

場所・時・年齢・手段・方法・原因・理由等  
資格『

「X（人）をY（役割）にて」『  
内裏の御使ひにて参れりければ、『

★「して」（連用修飾格）

手段・方法

そくなりける岩に、指の血して書き付けける。

使役の対象

人して、惟光召させて

動作の共同

友とする人一人二人して行きけり。

連体止めについて

擬換述法ともいわれるが、文章が連体形で終了することがある。「新鮮な空気よ」のように日本語には主語述語を使わない特殊な分があるが、連体形で分を終えることで疑似的にその文章を作っているものである。もちろん、連体形で終わっているものすべてがこれではない。たとえば、「ぞ」などが係り結びしているだけの時など。

・雀の子を犬君が逃しつる。

雀の子を犬君が逃したことよ！

★「より」（連用修飾格）

起点 『 』・比較の基準 『 』

手段 『 』

他夫の馬より行くに己夫し歩より行けば

經由 『 』

前より行く水をば、初瀬川というなりけり。

即時 『 』（連体形につく）

時の間のけぶりとなりなんとぞ、うち見るより思はるる。

★「から」(連用修飾格)

起点『』

手段『』

徒歩からまかりて、言ひ慰め侍らむ。

『

經由『』

直道から来つれど』

』

』

』



## 接続助詞

★未然形 十ば

順接仮定条件 『

悪人のまねとて人を殺さば、悪人なり。

★已然形 十ば

順接確定条件・原因理由 『

偶然 『

恒常 『

『かぐや姫は』いと幼ければ、籠に入れて養ふ。

石山にこもりたれば、夜もすがら雨ぞいみじく降る。

財あれば恐れ多く、貧しければ恨み切なり。



★ 終止形・形容詞の連用形 十とも

逆接仮定条件 『

枝は折るとも、幹残らむ。

』

★ 已然形 十ども (ど)

逆接確定条件 『

花咲けども、心うし。

』

★ 未然形 十で

打消接続 『

十月のつごもりなるに、紅葉散らで盛りなり。

』

★連体形 十を・が・に

順接確定条件・原因理由

単純接続

逆接確定条件

★連体形 十ものの・ものから・ものを

逆接確定条件

つれなくねたきものの忘れがたきにおぼす。

※「ものを」は和歌の句末で、終助詞的に詠嘆のこともある。

★…連用形 つつ

余情

山里は秋こそことにわびしけれ鹿鳴く音に目をさましつつ

★くながら

同時並行」

逆接」

そのまま」

身はいやししながら母なむ宮なりける。

」

旅の御姿ながらおはしましたり。

」

」

」

」

」



# 副助詞

★ばかり

限定 『

程度 『

『 『

★まで

範囲 『

程度 『

』

★など (なんと)

例示 『

婉曲 『

引用 『

』

』

』



☆「だに・すら・さへ」

★だに

類推『

※「まいて・まして」と呼応し「Xだに〜」。まいてY……」

『 虫だに時節を知りたるよ。』

『 最小の限度』

『 今宵だに、人しずめていととくあはむ。』

★すら

類推『

『 聖などすら前の世のこと夢に見るは、いと難かなるを、』

★さへ

添加『

★★★『

』と訳してはならない

『見る目のいときたなげなきに、声さへ似る者なく歌ひて、

』

』

★し・しも

強調『

↓』

『今し、羽根といふ所に来ぬ。』

』

『偽なきにしもあらず。』

』

※「ししば」という形が多い

』

』

』

★のみ

限定 『

』

強調 『

』

※ 強調「のみ」の訳し方の工夫：「のみ」が強調で使われているとき、こんな訳し方をする

XをのみVす 『

』

御心のみ惑はして去りなむことの、悲しく耐へがたく侍るなり。

『

』

## 終助詞

★文末＋かし

念押し『

いま一度起こせかし。

』

※文末接続（「かし」（念押し）や「な」（詠嘆）は文末接続）

☆な

★未然形＋な

自己の希望『

遊び暮らさな。』

』

』

★文末＋な

詠嘆『

憎しところ思ひたれな。』

』

』



★終止形 十な

禁止 『

東風吹かば匂ひおこせよ梅の花あるじなしとて春を忘るな

』

★な十連用形 十そ

禁止 『

※カ変・サ変には未然形接続

「なこそ」 『

「なせそ」 『

春な忘れそ 『

★  
体言 + もが

形・用(し)く + もがな・もがも

その他・助詞 + がな

他への願望』

…現在存在しない物・そうでない状態を願望する

老いず死なずの薬もが。

』  
とく京へもが。

★  
未然形 + ばや・な

連用形 + てしがな・にしがな

自己の希望』

ほととぎすの声たづねに行かばや』

いかで、このかぐや姫を得てしがな』

★未然形 十なむ・ね・に

他への願望 』

『 惟光とく参らなむ』とおぼす

★体言・連体形 十か・かな・かも

詠嘆 』

『 風吹けば峰にわかるる白雲のたえてつれなき君が心か

# 間投助詞

★を・よ・や

詠嘆『

』 閑かさや岩にしみ入る蟬の声

呼びかけ『

』・強調・整調『

朝臣や、さやうの落葉だに拾へ。

『

萩が花散るらむ小野の露霜に濡れてを行かむさ夜はふくとも

『

※ 「を」省略しても意味が通じる（そして目的語に付くわけでない）とき、整調・強調

※ 文末にある「や」の識別『

』か『

』か？↓『

あはれ、いと寒しや。』

御子はおはすや。』

我もしに、聖も失せなば、たづね聞きてむや

『

↓『 『 反語

』

↓『

』

疑問

』

↓『

』

詠嘆

』

』

## 同音の識別＋副詞

### ぬ・ねの識別

- ④ 未然形＋「ぬ」「ね」  
↓  
『 』
- ⑤ 連用形＋「ぬ」「ね」  
↓  
『 』
- ★上が未然形か連用形か区別がつかないとき  
（ ）  
『 』の時（ ）
- ⑥ 係助詞があるとき（ぞなむやかこそ）  
下は連体形なので↓  
『 』
- ⑦ 『 』の時、終止形  
↓  
『 』
- ⑧ 下の語で活用が規定されている時（ども・ば）  
↓  
『 』
- ⑨ その他↓  
『 』

### る・れの識別

- ① 『 』  
『 』  
＋らりるれ
- ② 『 』  
↓  
『 』  
＋らりるれ
- ③ その他↓意味による識別  
『 』

#### 復習

る・らる

つ・ぬ

## なむの識別

① 未然形 + 「なむ」

↓

② 連用形 + 「なむ」

↓

③ 「ナ変動詞 + む」

④ それ以外 ↓

★例外もあります…

助動詞 (に・ず・べく・まじく) + なむ

形容詞・形容動詞 + なむ

これらはすべて連用形についていても

↓ 『 『

## らむの識別

① 終止形 + 「らむ」

↓

② 『 + 「らむ」

↓

③ その他 ↓ いろいろある (たらむ…たり + む)

### 復習

む

## にの識別

- ① 体言 + 「に」 + 文章  
↓  
『 』 + 『 文章 』
- ② 文章 + 「に」 + 文章  
↓  
『 文章 』 + 『 文章 』
- ③ 「に」 + 助詞 + 存在  
↓  
『 』 + 『 助詞 』 + 『 存在 』
- ④ 連用形 + 「に」  
↓  
『 連用形 』 + 『 』
- ⑤ 状態・様子 + 「に」  
↓  
『 状態・様子 』 + 『 』
- ⑥ ナ変動詞の可能性  
↓  
『 ナ変動詞 』 + 『 可能性 』
- ⑦ 体言 + 「に」 + 「て」  
↓  
『 体言 』 + 『 にて 』 + 『 て 』
- ⑧ その他 ↓ 副詞など

## なりの識別

- ① 『 or 』 + 『 なり 』  
↓  
『 』 + 『 なり 』
  - ② 『 + 『 なり 』 』  
↓  
『 』 + 『 なり 』
  - ③ 伝聞の「なり」  
↓  
『 』 + 『 なり 』
  - ④ 推定の「なり」  
↓  
『 』 + 『 なり 』
  - ⑤ 断定の「なり」  
↓  
『 』 + 『 なり 』
  - ⑥ 『 の一部 ↓ 』  
↓  
『 』 + 『 なり 』
  - ⑦ 『 の「なり」 』  
↓  
『 』 + 『 なり 』
- Become の意味を持つとき。  
『 』 + 『 なり 』

## 副詞

あへて　　く打消…まったくくしない  
おほかたく打消…まったくくしない  
かけてく　　打消…まったくくしない  
さらにく　　打消…まったくくしない  
すべてく　　打消…まったくくしない  
たえてく　　打消…まったくくしない  
つゆく　　打消…まったくくしない  
つやつやく　　打消…まったくくしない  
よにく　　打消…まったくくしない  
をさをさく　　打消…少しも、めったにくしない  
いたくく　　打消…あまりくしない  
えく　　打消…できない(不可能)  
よもくじ…まさかくだろう  
いさく知らず…さあ、どうだかわからない  
ゆめ(ゆめゆめ)　く禁止…決してくするな

あなかしこく禁止…決してくするな(強い禁止)  
な(副詞)　くそ(終助詞) …くしないでくれ、してくれるな(やわらかい禁止)  
いつしかく希望・意志…はやくくしたい、しよう、してほしい  
いかでく　希望・意志…なんとかしてくしたい、しよう、してほしい  
たとひくとも…たとえくとしても  
いかで(か・かは)　く推量の助動詞・助詞  
…疑問　どうして…どのようにしてくか  
反語　どうしてくか、いや、くしない  
いかでくむ  
…「む」が意志(なんとかしてくしよう)  
…「む」が推量  
疑問Ⅱどうしてくか  
反語Ⅱどうしてくできようか、いや、できない



# 敬語法

## 敬語とは

(例)

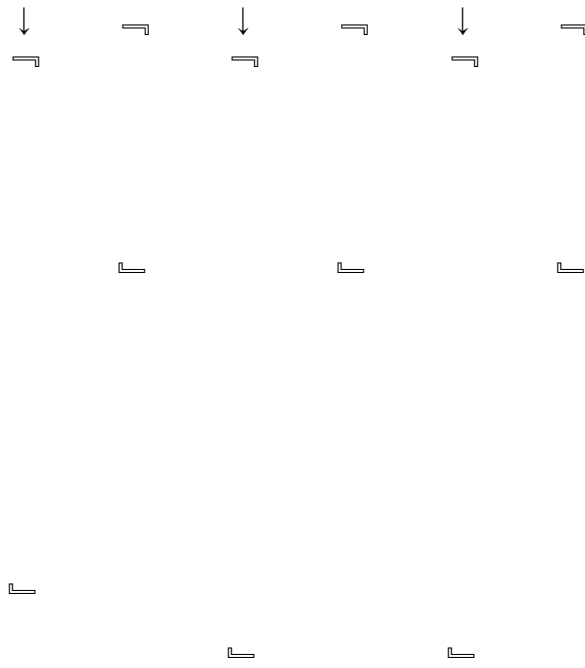
生徒が筆箱を人に借りるとき

★ 敬語の学習ポイント

敬語の種類 ↓ 暗記

敬意の方向 ↓ 読解

★ 敬語の種類



## 敬語使用例

給ふ

大納言、袴を与ふ。

(訳) 大納言が、袴を与えらる

奉る

尼、仏に花を与ふ。

(訳) 尼が、仏に花を与えらる

## 本動詞と補助動詞

補助動詞とは…

補助動詞になるのは、次のパターン。

- ① 動詞について敬意を表すもの
- ② 形容詞「べし」「ず」の下につく「あり」
- ③ 助詞を介して動詞の下につく「す」
- ④ 「て」「つつ」を介して動詞の下につく「あり」
- ⑤ 「て」を介して動詞の下につく「みる」



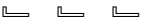
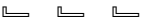
## 敬意の方向

(例) 大納言、翁に袴を給ふ。

誰から



誰に



練習

僧都、「尼、仏に花を奉る」と言ひ侍り。

かぐや姫、帝に不死の薬を奉り給ふ。

★ 二方向への敬意

## 敬語法応用

### 最高敬語

「せ給ふ」「させ給う」などの

二度敬語を用いる場合を最高敬語という。

※ 『』に限る

【練習】傍線部に気を付けて現代語訳せよ。

白河院降りさせ給ひてのち。金葉集かさねて俊頼朝臣に仰せて撰ばせ給ふにこそ、初め奏したりけるに、

---

宮はいとやすらかに、今少し大人びさせ給へる御けしきの、紅の御衣にひありあはせ給へる、たぐひはいかでかとみえさせ給ふ。

## 自敬表現

夕供御参る折、公卿達常の御所にさぶらふに仰せられ出だして、「わが御身、三十三にならせおはします。御厄年に負けたるとおぼゆる」

傍線部の敬語における敬意の対象は誰か？

自敬表現とは、

### ★敬語のポイント

敬語の種類 ↓ 暗記

暗記すべきは二種類以上ある単語！

元の意味に連動して訳し方も覚えること。

敬意の方向 ↓ 読解

文章中では常に主体者を意識すること。

「と・とて」に要注意！

最高敬語・自敬表現

地の文↓最高敬語（れ・られ給ふはない）

会話文↓動作主に注意して識別。